「危機の時代にあって　過去と未来をつなぐために」

人間科学研究所所長
森　茂起

人間科学研究所では、二〇二〇年度より、新しい研究事業「過去と未来をつなぐ～危機の乗り越えに向けて」（三年間を予定）を開始します。二〇一九年度まで四年間続けてきた事業、「現代人の心の危機に関する共同研究～Phase 5：過去と向き合い、未来を創る」を受け継ぎながら、研究活動を次の段階に進めるための事業です。

そこで、この場を借りて、今までの活動の振り返りと、今後三年間の展望をしておきたいと思います。

研究所は開設以来、「現代人の心の危機」をテーマとして活動してきました。臨床心理学と人文諸科学の共同体制によって設立された人間科学科および人間科学専攻が母体となって実施した「心の危機」研究がその源にあります。地域を襲った阪神淡路大震災からの復興が設立時の課題であり、精神医学、心理学で「トラウマ（心的外傷）」の概念に光が当たった時代でもありました。二〇二〇年度から三年間の予定で進める事業も、「危機の乗り越え」をその目的としています。

実を言いますと、過去の研究事業の進行の中で、「危機」ではなく、より肯定的な響きの言葉を主題にした方が良いという意見が出されたことがありました。肯定的側面に注目する研究者は、「トラウマ学」の中にも存在し、トラウマ＝傷よりも、それに対する「レジリエンス＝回復力」、トラウマ後の「成長」、予防や回復のための「資源（リソース）」などを重視しようとします。もちろんそれらが重要な視点であることは間違いありません。ただその一方で、肯定的な側面への注目は、危機の認識を甘くする危険をはらんでいると私は考えます。危機を十分認識した上でそれを克服する力に注目するのは良いのですが、危機の理解が薄い段階で肯定的側面に目を向けると、危機の認識が回避される恐れがあります。なんとかなるという感覚が危機意識を弱めるのです。

甲南大学のキャンパス内に、「常に備へよ」の言葉を刻んだ碑があります。地域を襲ったもう一つの大災害、阪神大水害後に、学園の創立者、平生釟三郎が語った言葉です。そこには危機はそもそも認識しにくいものであるという洞察が込められています。

研究所設立の契機となった阪神淡路大震災から四半世紀が過ぎ、いわゆる記憶の風化も感じられる現在ですが、昨今の出来事を見ますと、危機に対する認識と備えの必要性がますます高まっています。私たちは、二〇二〇年度から始まる研究事業に

もやはり「危機」という言葉を組み込むことにしました。

二〇一九年度までの研究を振り返り、新年度の研究計画を構想するにあたり、研究所の主題を三つの柱に整理しました。（1）「社会による子育て〜ソーシャルペダゴジー」の概念のもとに進める、「子ども・子育て」に関する研究・実践、（2）トラウマ（戦争、災害、虐待、暴力等）、人生史、記憶を対象にした、思想、心理学、アート、歴史、社会学などによる学際的研究、（3）人間科学の哲学的・思想的基盤を検討する研究、の三つです。

（1）は、研究所がその設立時から継続して取り組んできた主題です。「ソーシャルペダゴジー」とは、およそ「社会による養育」、あるいは近年厚生労働省のワーキンググループが提示したビジョンの表現を用いれば「社会的養育」を意味する言葉です。「子ども・子育て」の主題もまた、少子高齢化が進む中で、社会が抱える危機と関係しています。二〇一九年度までに行なってきた子どもおよび親子を対象とした実践活動の発展的継続と、兵庫県の「ひょうご子ども・子育て未来プラン」と連携した研究がその中に含まれます。後者には、文学部（人間科学科、社会学科）、マネジメント創造学部、経済学部、経営学部の各学部の研究者が参加して学際的に現在の子どもや子育てが置かれている課題を理解し、それを解決する方策を検討します。また、研究成果を生かした「ライフプラン教育」の実践的研究を行います。

（2）に掲げる「トラウマ」も、阪神淡路大震災以来、研究所が継続的に扱ってきた主題です。戦争、災害、虐待、暴力等の様々の破壊的な出来事を私たちはどう受け止めるのか、そこからどう回復、復興するのか、また、それらの出来事をどう予防するのか、といった様々の段階や側面に渡る研究を行います。これに関連する主題として、「人生史」、「記憶」に焦点を当てた学際的研究も行います。

（3）では、哲学・思想分野を有する研究所として、人間科学の基礎付けを行うことを課題としています。一つの具体的な研究主題として、甲南大学の財産である九鬼周造文庫を生かした九鬼周造研究に取り組んでいきます。

以上の研究主題は、いずれも危機を見据えながら、過去を未来につなげていくことを目指すものです。地域の専門家、（子どもを含む）市民に開かれた研究所として活動してまいりますので、研究所の活動へのご支援、ご参加をいただければ幸いです。本紀要は、研究員の研究発表の場として、研究所が開催したシンポジウム等の成果公表の場として、役割を果たしていきます。甲南大学機関リポジトリに登録されていますので、国内外から閲覧していただけるよう内容を充実させていきたいと考えています。

（もり　しげゆき）